

ギャラリーの照明が新しくなります！

只今、当館の貸館であるギャラリーでは、照明設備のリニューアル工事を実施しています。

開館以来35年間、多くの皆さまにご利用いただいていたギャラリーですが、より質の高い展示空間を提供するため、すべての照明機器を美術展示に適したLED照明へと一新いたします。新たに導入されるLED照明は、美術館での展示に適した演色性の高いものを採用しており、絵画や彫刻、写真など、作品の色彩や質感を自然に引き立てることができます。展示スペースに応じた光の調整も可能となり、これまで以上に多様な表現に対応できる柔軟性も備えています。展示する方にも鑑賞する方にも、より心地よく作品と向き合える空間となります。

当館のギャラリーは、これまでに個展やグループ展、学校や団体による展示など、幅広い発表の場として、多くの方にご利用いただけてきました。その一方で、展示が初めての方や経験の少ない方にとっては、

少しハードルが高く感じられる場面もあるかもしれません。

そうした方々にも気軽に展示に挑戦していただけるよう、昨年度からは、「てみるの時間」のイベントの一つとして、「ぶんかつギャラリー」という企画を実施しています。複数の参加者でスペースを分け合いながら展示を行うこの企画は、自らの作品を発表する第一歩として好評を得ており、今年度も9月頃から参加者を募集する予定です。ぜひ、新しくなったギャラリーで、“発表してみる”ことに挑戦してください。

なお、当照明工事にともない、ギャラリーは12月末まで休室予定となっております。（工事完了後、ギャラリーの利用を再開いたします。最新情報は当館ホームページおよびSNSにてご案内いたします。）ご不便をおかけしますが、ご理解とご協力をお願いいたします。新たな光に包まれたギャラリーで、皆さまの創造の場がさらに広がることを願っています。

石丸一（いしまる はじめ）

〈瓶（仮称）〉

1950年代 油彩 キャンバス 71.0×59.0cm



本作は、画壇と疎遠になっていた時期に描かれた作品です。背景は自由な線で横に五分割され、赤茶、赤、茶、緑の四色で塗り分けられています。そして、線の上に大きさも形もさまざまな瓶が並んでいます。静物画でありながら、独特のリズムと動きが感じられる作品です。この作品には、三種類の描法が使い分けられています。一つ目は、赤や赤茶などの部分に見られる、筆ムラのない均一なベタ塗りです。二つ目は、緑の部分で、背景の一区画を緑の点でぎっしり埋めています。最後は茶の部分で、よく観察すると、グレーの下地の上に白を重ね、その上から茶を塗り、細い線で茶の表面を削っています。面、点、線の三つの異なる描法を用いることで、物体の質感の違いを表現しています。石丸の画業を通観すると、彼が時代ごとに画風を大きく変えていたことがわかります。初期の明快な構図の作品から、キュビズムやシュルレアリスムといった海外の前衛の影響を強く受けた作品へ、そして、1930年代には点描で描いた具象的な風景画なども制作していました。医師という本業があったことで、画家としての立場に縛られることなく、自由に創作を楽しむことができたからなのかもしれません。本作もまた、石丸が新たな表現に挑み続けた軌跡の一つといえるでしょう。

（主任学芸員 久米千裕）

石丸一は、現在の徳島県小松島市に生まれました。生家は代々漢方医を営む旧家で、石丸もまた京都帝国大学医学部に学び、医業の道に進みました。卒業後は大阪市内で医院を開業し、その傍らで信濃橋洋画研究所に通い、小出檐重や黒田重太郎に洋画を学びました。

石丸は1927年に始まった全関西洋画展に第1回から第17回まで、ほぼ毎年出品しています。1928年からは二科展にも出品するようになりました。1931年には関西の仲間たちと共に「ロボット洋画協会」を結成し、シュルレアリスムの影響を感じさせる作品を発表して美術界の注目を集めました。また、1938年には二科会の前衛美術家たちによるグループ「九室会」の結成にも参加しています。

戦後は、1948年に関西の画家たちと共に「汎美術協会」を結成しましたが、やがて画壇と距離を置くようになりました。その後は、ときおり個展を開く程度で、画壇と無縁な場所で絵を描き続けました。

「美術と野獣」展に関する催し

学芸員による展示解説

10月5日[日]、11月2日[日]、
11月16日[日] いずれも14時－15時
担当:浅田真珠(学芸員)
ロビー、展示室3 申込不要 要観覧券

こども鑑賞クラブラボ

10月25日[土] 15時－16時30分
進行:美術館スタッフ
対象:中学生～大学生 美術館ロビーに集合
定員:10人程度
電話・メール申込(先着順、当日参加可) 無料

カタタチサトとおどる、夜の森の美術館

11月1日[土] 17時－19時
講師:カタタチサト(ダンサー)、
近代美術館スタッフ
対象:中学生以上(軽い運動ができる方)
ロビー、展示室3、文化の森総合公園
定員:10人程度 電話・メール申込(先着順) 無料

手話通訳付き展示解説

11月8日[土] 10時－11時30分
担当:浅田真珠(学芸員)
対象:どなたでも(聞こえる方もどうぞご参加ください)
ロビー、展示室3 申込不要 要観覧券

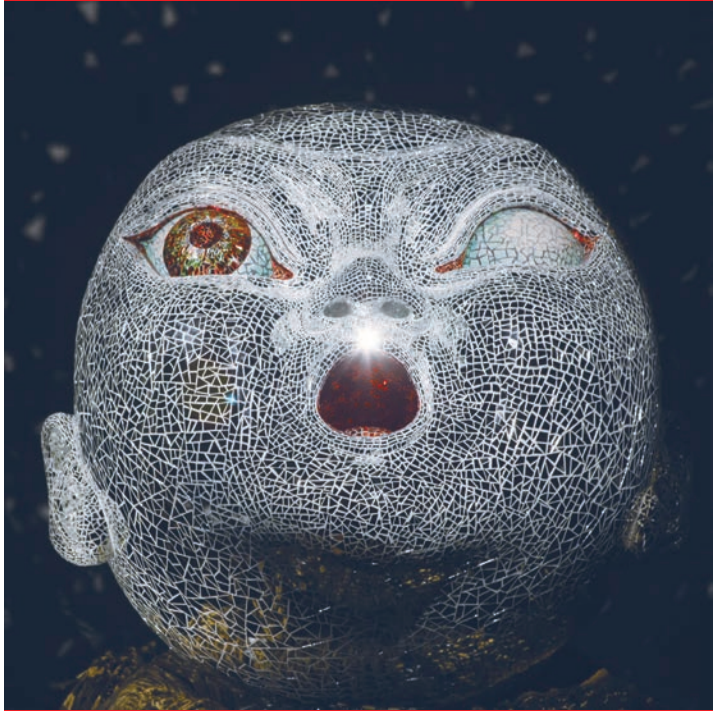
こども鑑賞クラブ+

11月15日[土] 14時－14時45分
進行:美術館スタッフ
対象:小学生(保護者同伴可) 美術館ロビーに集合
定員:30人程度 電話・メール申込(先着順、
当日参加可) 無料(保護者は要観覧券)

申込先:電話 088-668-1088

メール ae@bunmori.tokushima.jp

催しの詳細および追加は
決定次第、当館HPや
SNSでお知らせします。
https://art.bunmori.
tokushima.jp/beast



鴻池朋子(Earth Baby)2009年 ©Tomoko Konoike

開館35周年記念展

美術と野獣

一人間の根源へ

2025年10月4日[土]－12月14日[日]

*会期中、一部作品の展示替えを行います。
助成:一般財団法人地域創造

はじめに

野獣とは、文字通り「野生の獣」を指し、本能のままに荒々しく生きているようなイメージがあります。一方、人間は、高度な言語や技術を開発し、文明を発展させてきました。人間は、野獣とは全く異なる存在に思えるかもしれませんが、人間は野獣ではないーと言い切ることができるでしょうか。かつて人間は、自然の中で獣と共に生きていたはずであり、今を生きる私たちにも「野獣」のような性質が潜んでいるのではないのでしょうか。当館は、今年で開館35周年を迎えます。コレクションの収集方針の一つが「人間像」であることから、長年にわたって「人間」というテーマに取り組んできました。本展では、人間の中の「野獣性」を見つめ直し、美術を通して人間の根源に迫っていきます。



ポール・ゴーガン(ナヴェ・ナヴェ・フェヌア(かぐわしき大地))
1893-94年 埼玉県立近代美術館蔵

The Tokushima
Modern Art Museum

135 October
2025



浅井裕介 右から「いのちの手触り1」・「いのちの手触り2」2024年 作家蔵 撮影・松野誠、写真提供・川崎市岡本太郎美術館

1 人間と野獣のあいだ

展覧会の最初に、2人の現代作家の作品を通して、「人間」と「野獣」の関わりや繋がりに思いを巡らせてみましょう。

ロビーでまず皆さんを待ち受けるのは、鴻池朋子(1960-)の〈Earth Baby〉です。キラキラと輝く巨大な赤ちゃんの顔。人間のみならず、この地球上に生きとし生ける生命の源のようにも感じられます。鑑賞者の姿を鏡のように映し出し、その人自身の根源を探す旅へと誘います。

浅井裕介(1981-)は、土を主な画材として、人間や動物、植物などあらゆる生き物が入り混じったようなイメージを生み出しています。近作の〈いのちの手触り1〉〈いのちの手触り2〉では、鹿の皮や血も用いられています。森羅万象に宿る生命の豊かさや生と死の循環が、生々しい実感を伴って伝わってきます。

私たち人間は、言語により「人間」、「野獣」と区別しながら、効率よく世界を認識してしまう傾向がありますが、彼らの作品は、未分化で原初的な世界を捉えるための新たな視座を与えてくれることでしょう。

2 激しく、荒々しく

西洋美術史を概観すると、20世紀より前は、物語や外の世界を作品の中でいか



モーリス・ド・ヴラマンク〈木のある風景〉1950年頃 ひろしま美術館蔵

にリアルに表現するかが重視されてきました。これに対し20世紀は、人間の内面や作品そのものの物質性をどのように表現するかが追究されたと言えるのではないのでしょうか。

20世紀初めのパリで、その激しい色彩と荒々しい筆致から「野獣派(フォーヴィスム)」と呼ばれた画家たちがいます。その一人モーリス・ド・ヴラマンク(1876-1958)の〈木のある風景〉を見てみましょう。原色と揺れ動くような筆遣いによって、草木や道が表現されています。風景画においても、本能にしたがって描くことにこだわり続けた彼の姿勢がうかがえます。

白髪一雄(1924-2008)は、床に広げたキャンバスに足で描くアクション・ペインティングで知られています。〈猪狩 壺〉は、

激情的な抽象表現を求め、特に暴力的なイメージを制作していた時期の作品です。猪の毛皮と、血しぶきのような赤い絵具が鑑賞者の心を揺さぶります。ぜひ、実際の作品を見ながら、理性だけでは解釈しきれない人間の内面性に触れてみてください。

3 野生の目

フランスの人類学者クロード・レヴィ=ストロース(1908-2009)の『野生の思考』という著書があります。彼は、近代以降の効率や計画を重視する合理主義に縛られない、人間が本来持っている野生状態の思考方法を、先住民やその文化から見出しました。

本章では、科学や産業の革新が相次ぐ



白髪一雄〈猪狩 壺〉1963年 東京都現代美術館蔵

20世紀において、当時の社会や文明、美術規範などを批判し、先住民や動植物、古代の遺物などから生命の豊かさや力強さを再発見し、人間本来のあり方を求めた芸術家たちをご紹介します。

ポール・ゴーギャン(1848-1903)は、西洋文明からの脱却を目指し、原始への憧れを抱き続けました。〈ノア・ノア〉連作は、彼が初めてタヒチに滞在した際の体験をもとに描いた木版画10点で構成されています。生き生きとした人物や動植物、目に見えない死の世界などが繊細に描き込まれています。

岡本太郎(1911-1996)は、縄文土器との出会いや日本各地への旅を経て、「芸術



岡本太郎〈顔Ⅲ〉1968年 川崎市岡本太郎美術館蔵

は呪術である*」という宣言に至りました。〈顔Ⅲ〉では、二つの目を持つ何かが浮かび上がっています。顔や目、飛翔するイメージは岡本作品に繰り返し登場し、呪術的なエネルギーの象徴であったと言えます。

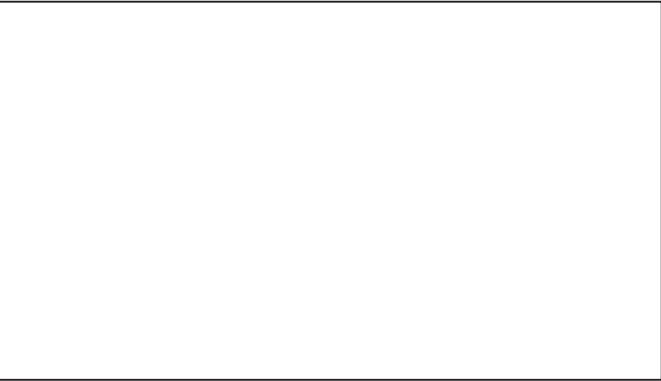
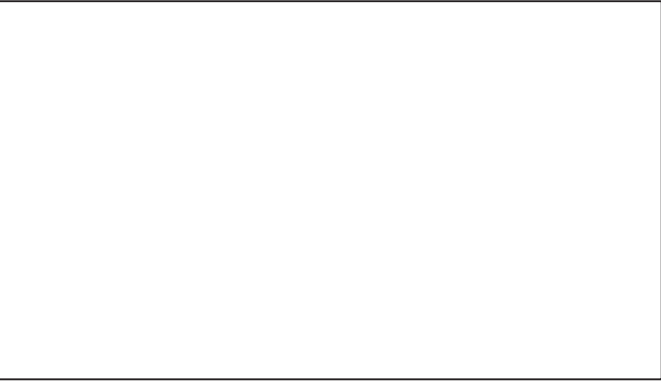
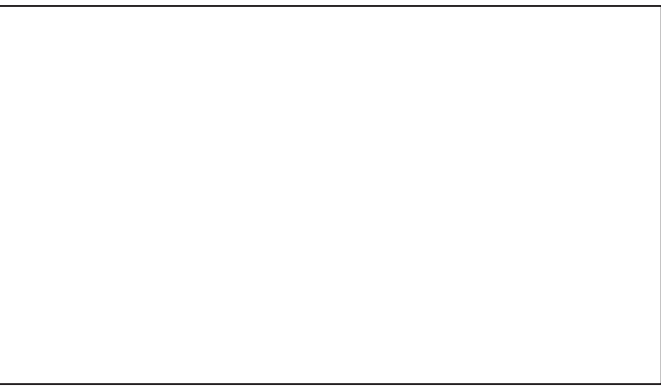
おわりに

私たち現代人は、急速に進む社会の変化や科学技術の発展に伴い、生き物としての本能や自然とともに生きているという実感を見失いつつあるのではないのでしょうか。本展が皆さんにとって、自分の中に潜む本能的で荒々しい性質を改めて見つめ直し、地球さらには宇宙という壮大な自然の中における、人間や自分という「命」と向き合う機会となれば幸いです。

展覧会の最後には、「みんなの中の野獣」という交流コーナーを設けています。ここでは、皆さんの日常生活で自分に潜む「野獣性」を感じたエピソードを紙に書いて貼ることができます。他の人の中の野獣性を知ることで、あなた自身にも新たな気づきが生まれるかもしれません。また、展覧会図録(2026年1月頃に発売予定)には、「わたしの中の野獣ノート」というワークシートを掲載します。作家や作品だけでなく自分自身とも向き合いながら、自分の奥に潜む気持ちや考えを自由に書き留めてみてください。 (学芸員 浅田真珠)

*岡本太郎「呪術誕生」『みづゑ』1964年2月、708号、p.70

Art and Beasts
-Approaching the roots of humanity



徳島県立近代美術館ニュース

第135号 2025年10月1日発行(10月号)

発行: 徳島県立近代美術館

770-8070 徳島市八万町向寺山

文化の森総合公園

TEL:088-668-1088 FAX:088-668-7198

美術館や展覧会についての情報は

当館ホームページをご覧ください。

<https://art.bunmori.tokushima.jp/>

